

自然の匠と一如して
想へば懐しバラダイス
タベチ曲にさすらへば
ラインの流その如く
アルプス連峰影映へて
いにしの姿かわらねど
有爲轉變は世のならひ
君は自然に歸れども
自然を慕ふ孤影あり
孤影の聲ぞこの詩篇

不變の理

中澤小樹

嗚呼鹿苑の朝より
跋提河畔の夕まで
横説堅説五十年
高さ理想のみ教も。

ヨルダン河に神の聲
洗禮うけたるキリストの
十字架上の極刑も
あゝ人類へのメシアなれ。
黄塵さかまく小町なる
辻に立ちての雄叫びも
寒山佐渡のかんなんも
一切衆生の救済ぞ。
げに大聖の一生は
煩惱の犬を逐ひやりて
菩提の鹿を招きつゝ
下化衆生への一路なる。
時世の流れ如何にせん
宇宙の眞理大聖の
遺命も阿片と捨て去りぬ
されど上求の人々よ
温古知新のその中に
不變眞理の輝きは

げに大聖の御教の
いとも貴き一路のみ。

四季

松村芳仙

春

青空から落ちる春の光は
目も眩むばかりに明い
春の軟かな光は
細道の左右を若草で色どつて居る
地にも微笑の心持が溢れてゐる。

夏

夏の日の激しき光
四邊はかつとしてゐる
草の葉はむされて
風は輝いて

広い天地は沈黙と吐息とを産んで居る。

秋

晴れた秋の日和の濃い蒼空
白い雲が雲母のやうに輝いてゐる。
九月の日は明るかつた
夏よりも明い
物の色に滲入る光ではなく
物の表を軽く動かす光である。

冬

弱い冬の陽は
時々雲間を洩れて來る
空氣は冷たいけれど
黄色い光線が
ほんのりと窓の障子に映る。(終)

人間劇場

佐藤翠嵐

人生は一つのシアターである——
無表情な人間社會の舞台上に
踊る踊子、それが人間の姿なのだ